『比較民俗研究』8．1993／9

橋の民俗

― 漢民族の橋の事例を中心に ―

周　星※

河は大自然の現象で，橋は人類の知恵が働かせた文化である。河の岸は両岸にいる人々の往来を止まらせたが，橋はそれを繋ぐ。河と橋の存在は複雑な空間と文化の形成とも意味しているが，橋と橋のそばの空間では，各民族は豊かな想像力を生かし，橋に関する民俗と文化を醸成した。

日本の民俗学者佐野賢治氏は「橋の象徴性－比較民俗学的一素描－」(1)で，江戸の下頭橋，白山行事中に架けられた布橋，中国侗族の風雨橋，苗族の敬橋節と漢民族の葬儀の礼法に渡る奈何橋などの民俗について，比較し，研究なされている。橋の民俗およびその象徴的過渡性と境界性は，中国の諸民族における生活と信仰の中に，確かに重要な位置をを占めている。本稿は漢民族に関する橋の民俗文化を中心に記述と分析し，今後の比較研究に必要な提示を提供しておきたい。

橋を渡り，厄を払い

漢民族の年中行事の中では，元宵節（旧暦の一月十五日）の前後の日に，人々は厄を払い，福を祈るため，外へ出て，橋を渡る風俗がある。これは全国的な行事でもある。

橋を渡りを「度厄」，「走百病」，「遊百病」，「走平安路」，「遊橋」，「遊安」，「過三橋」などとも言う。橋を渡る習俗は地方により，異なっているが，基本的な目的はほぼ同じである。それは病気を追い払い，子供を求める。中国の江南水郷地方では，その夜に，三本の橋を渡らなければならない。もし，怠けたら同じ橋を三回渡っても，病気を追い払う効果はない。明朝の劉侗，于奕正が著した『帝京景物略』では，北京のお正月に，橋を渡る習俗について記録した。清光緒二十八年に再び印刷された『順天府志』に，十五夜では，数名な女性は一緒に出かけることは「走百病」という。橋がある所に三、五人が一緒に渡り，厄払うためであると書かれていた。通州，順義，大興，平谷などの地方では，人々は十六日に橋を渡り，百病を予防するためである。天津南皮県でも同じ習俗がある。『宛暑雑誌』でも橋を渡るのは厄を追い払うと書かれていた。又，昔北京で流行した「正月正」というパブリックソングの中に「走橋不腰痛」（橋を渡ったら，腰痛が治る）の歌詞があった。ちなみに，上述の地方では，年に一度の橋渡りは厄と病気を追い払う

※北京大学社会学人類学研究所助教授
筑波大学歴史・人類学系外国人特別研究員

ほかに，長寿を願う動機もある。

山西省郟県あたりでは，お正月に橋がある所に人々はお互いに譲らない橋を渡り，百病を払うためという。橋がない所には，衆人は板を集め，高い橋を架け，男女一緒に渡り，これは「過天橋」という。衡水あたりに，橋渡り，病気払い行事は観灯活動とともに行われる。又，河北省の永平，涿州，交河などの地方でも類似の習俗が存在している。

山東省では，お正月に女性が大勢で一緒に出かけ，橋を渡り，厄を払う活動はその日の深夜まで行われる。『茌平県志』と『招遠県志』の記録により，旧暦一月十五日観灯の夜と十六日の残灯の夜では，女性たちは城牆の上と郊外に遊ぶことを「走百病」，「過橋梁」という(2)。威海地方あたりでは，橋渡り以外に，人々は廟へ行き，神様に一年間の無事を願う。黄県では，女性たちは夜の「走百病」を行う時に，必ず西関にある月牙橋を渡らなければならない。河南夏邑などでは，人々は「走百病」に出かける前に，まず方向を占い，そして，その方向にある橋を渡る。

昔，上海の旧暦一月十五日，元宵節の夜には，三本の橋を渡る習俗があった。女性と子供たちは提灯を持って，一緒に出かけ，必ず三本の橋を渡ってから帰る。これは病気を追い払うためである(3)。三本の橋を渡る習俗については，李行男が書いた竹枝詞には，「夜闌還趁街頭月，走遍三橋倩婢扶」という詩句があった。昔の上海民謡にも「正月十五鬧元宵，鑼鼓龍灯走三橋」の歌詞が載せられた。「橋の郷」と言われている蘇州では，元宵夜に，若い女性たちは外へ出かけ，必ず，三本の橋を渡る，百病を退去することができると云われていた。この夜，蘇州の人々はたくさんの橋の上に「橋塔」を作る。「橋塔」というのは橋の真ん中に大きな柱を一本立て，柱の上から長い帯で橋の袂に結んで，提灯を斜めになっている帯に掛け，塔の型にする。人々は橋を渡りながら，「橋塔」と「橋灯」を観賞することができる。江蘇の六合と安徽の桐城などでは，女性たちは「走百病」へ出かける時に，必ず，瓦の罐を持ち，橋の側に捨てる。こうすると，この年の厄と病を捨てることができる。

広東省の汕頭地区では，昔，元宵節の夜には，郷民たちが提灯を持って，各橋を渡る風景がよく見られた。呉川県の梅篆鎮では，毎年の一月十五日の橋梁節の時に，橋を渡る人は橋の下にある河辺で，手を洗うこともある。これはその一年の悪い運と苦労を洗い流せ，新しい年からいい運を運んでくるためである。

昔，福州でも，元宵節の夜に，女性たちは籠に乗って，橋を渡る時にわざと，転ばせ，これを「走三橋」あるいは「転三橋」という。人々はたくさんの橋を渡ったら，長寿することと災難を避けることができると信じている。蒲田では，正月十六日の夜に，一年の無病無災を願うため，外へ出かけ，橋渡りをする。海澄では，元旦から元宵の夜まで，女性たちはお互いに誘って，一緒に橋を渡り，長寿を願う。又，西南諸省地方に住んでいる漢族の人々も，類似の「遊百病」の習俗がある。

漢民族の「橋を渡り，厄を払う」習俗は，男性はたまには参加するが，ほとんど女性を中心に行われた。橋を渡る目的は厄を払うためである。厄を払う象徴としての橋渡りである。大切なのは，橋を渡る目的は健康を祈るだけではなく，又，子供を求める目的でもある。漢民族の「橋を

渡り，厄を払う」習俗と比較することができるものに，韓国の「踏橋」(4)と日本の「過七橋」がある。

一月十五日の橋梁節

もう一つ，元宵節の夜に橋渡りの習俗と密接な関係があるのは，広東省呉川県梅篆鎮の「橋梁節」(5)である。

粤西鑒江の下流にある梅篆鎮では，毎年一月十五日に，人々が花の橋を渡る習俗がある。この日に，鎮民は梅篆鎮と隔海村を繋っているアーチ橋を，花で飾り，提灯を掛け，各色の布，風船，紙花などを橋の両側に結び，盆栽と書画も飾った。

花の橋に飾られる紙花は，橋を渡る者に摘ませるためである。出産適齢期の女性は白い花を摘んだら，男の子が生まれる。赤い花を摘んだら，女の子が生まれる。花の橋の袂では“茨菇”を売る屋台があって，“茨菇”を買ったら，男の子が生まれるそうだ。伝説によると，一昔前には，花の橋は「男橋」と「女橋」に分けられていた。男性と女性は別々に遊び，一緒ではなかった。その後，段々男女は一緒に花の橋を渡れるようになった。

一月十五日の夜に，花の橋を渡る習俗には男女の交際と子を求める意味が含まれている。橋は子を求めることの関係については，漢民族の民俗の中にたくさんの例証がある。

浙江省の農村では昔，橋の杭を盗んで，その杭を赤い紙で赤ちゃんの形のように包み，子を求めたい家に送る習俗があった。『清裨類鈔・時令』の記載によると，元宵節の夜から二月二日の前に，淮安では，“送子”の習俗がある。これは必ず，東門外にある麒麟橋の煉瓦を取り，銅鑼と太鼓をたたきながら，それを子を求めたい家まで送り，ベッドの上に掛けさせる。

浙江省の金華，蘭渓，衢州，浦江などの地方では，毎年の一月に必ず，盛大な「迎橋灯」の行事を行う。「橋灯」は「龍灯」とも言う。龍頭と灯橋は二部分に分けられる。龍頭は公的，村のものであり，灯橋は各戸農家から作り出すものである。「迎橋灯」の行事では，子を求めることと深い関係を持つ「接灯（丁)」「分子息」などの儀式が行われる。人々が龍灯を橋灯と言うのは，子を求める意味が含まれているためだろう。

元宵節の橋渡り，厄払いの行事では，どの地方でも子を求める意味が含まれている，あるいはそれを「走橋」の象徴的な意味とともに行われる。『宛平県志』の写本版の記載によると，元宵節の夜には，男女は一緒に出かけ，「摸釘」，「過津漂」をする，これを「走橋兒」と言う。昔，北京では「走橋」とともに，門釘を触り，子を求める風景もたまたま見られた。又，河北省寧強，福建省浦田及び山東あたりでも，「走橋観灯」，「摸釘祈嗣」の行事が行われる。「灯」，「釘」，「丁」の語呂合わせは同じで，意味も通じ合う。それで，「走橋」の習俗が「観灯」と「摸釘祈嗣」の習俗を伴って行われることは，更に研究価値があると思う。浙江省のある農村では，元宵節の夜の「走百病」の時に橋の煉瓦を拾い，それは橋の生命力と生殖力が伝わってくるようである。『汪鈍翁全集』には「走百病」を詠う詩が書かれた：「争従橋畔歩紆坌，……育女生男全如願」。こ

の詩から分かるように，「走橋」は祈嗣と関係することが明らかである。

江蘇省丹徒県仁和門外では，「孩児橋」という名の橋がある。その橋の石欄干には子供の模様を刻んでいる。貴州省都勺詩南区剣河の上に「百子橋」という名の橋がある。橋の名から，橋は祈嗣民俗と密接な関連があると分かった。江蘇太湖地方では，「棗子橋」という名の橋があり，この橋には魯班が棗を橋の杭に化ける民話があった。周知のように中国語では，「棗子」と「早子」は発音が同じ，語呂合わせのため，棗子は漢民族の祈嗣象徴では縁起のいい礼儀食品となる。ある地方で橋の杭を赤ちゃんの形にして，これを子を求めたい家まで送る習俗から連想すると，「棗子橋」も祈嗣の民間信仰と多少関連があるだろう。

橋　関

日本の民俗学者永尾龍造氏が著した『支那民俗志』に，漢民族民俗の「断橋関」について書かれた(6)。子供はある年齢になると，橋を渡る時に危険に遭いやすい，油断で，水に溺れるか，あるいは橋が切れて，橋から転落する。それで，この年齢になったら，橋を渡る時，水際で遊ぶ時に随分気を付けなければならない。

湖南省常徳地区の桃源，沣県，石門などでは，子供のための「渡花樹関」という民俗がある。子供は満三，六，九歳になる時，占い師を頼んで，神様の力を借り，子供の成長が無事であるような儀式を行われる。占い師は儀式を行う時，神壇の前に二つの椅子を両側に置き，象徴的な竹橋を作り，「花樹」（各色の布が掛けられている竹枝）を帯で橋の袂にあたる椅子の方に結ぶ。花樹は子供の霊魂を象徴する。花樹関を通過する意味は子供の霊魂を導いて，橋を渡らせることである。子供は成人になるまでの過程中では様々な「関煞」があり，その中に「断橋関」，「水火関」など七十あまりの種類がある(7)。「渡花樹関」の儀式が行われたら，子供の成長は無事になれると地元の人々はそう信じている。言い換えれば，橋渡りの象徴的な意味は年中行事の中だけではなく，人生の通過儀礼にも含まれている。

ところで，橋関は赤ちゃんが誕生する前から，もうすでに存在している。江蘇省常熟市白茆郷あたりに，婦女は臨月の時に，自家から麺などのものが届いてくる，この麺を「催生麺」（早く生まさせるための麺）という。この「催生麺」を届ける時に必ず，一本の橋を渡り，だから，「過橋麺」とも言う。妊婦はこの「過橋麺」を食べたら，順調に出産することができるそうだ。浙江省紹興の習俗では，自家から「過橋麺」を届ける時，三本の橋を渡らなければならない。そうすると，母子とも平安長寿することができる。面白いのは，江浙あたりでは，妊婦は工事中の橋の現場へいけない。このタブーは赤ちゃんが生まれる時の「橋関」と関係があるかもしれない。

生命が誕生後，たくさんの「関」が待っている。これはまず，病気である。漢民族の民俗の中に各種の「過橋関」，「撞橋関」があったのは，この原因から生まれてきたのである。江蘇省蘇州市では，昔，常に，二月二日に，赤ちゃんに「剃頭礼」（髪の毛を剃る）を行い，「剃頭礼」が行われた後，母親の男の兄弟は赤ちゃんを抱いて，「走三橋」をする，この三本の橋の名は「太平橋」，

「吉利橋」,「状元橋」(あるいは「万年橋」)と言う(8)。又,他の地区では,赤ちゃんに「剃頭礼」をした後,赤ちゃんを他人に抱かせて,雨傘を差し,街を一周し,一本の小橋を渡る。これは赤ちゃんの胆を太らせるためである。

嘉興あたりでは,子供が一歳の誕生日の時に「過関」の儀式を行う。この日に,子供に新しい洋服を着せ,「虎頭帽」を被せ,銀のネックレスと「百歳鎖」を首に飾らせるなどし,正屋堂に置いてある神壇の前にお礼をする,そして,屋の軒に架けている竹の梯子を下に通らせ,母親の男の兄弟に抱かれ,村一周をする。この儀礼中の竹の梯子は「橋」の象徴である。又,この日に子供が二本の橋を渡る方が吉という人もいる。

浙江省地区では,子供の幸福,健康,平安,長寿などはほとんど橋に関わっている。子供はもし病気あるいは「関煞」がある場合は,紙で長さ二メートル,幅六十センチの「橋」を作り,これを僧侶が法事をする所に置き,又,如来,観音あるいは釈迦などの像を掛けて,子供に紙橋を回させ,僧侶がお経を読み,最後に紙橋を燃やす。

四川に住む漢族地区では,子供の「生辰八字」と面相を,「星占」あるいは占い師に見せ,もし占いの結果から某月某日某時に何の悪いことに遭うと推測されたら,このことを「関煞」それとも「橋関」という。子供無事に「関煞」に渡れるため,「射将軍箭」の儀式を行う。しかも占い師の言った方向へ,一本の橋或いは三叉路を探す。線香,蠟燭,酒,ご馳走,竹の弓箭などを備え,親と子は一緒に,その場で路人の通過を待つ。通過する路人を頼んで,竹の弓箭を射させ,「関煞」を鎮する。それから,酒とご馳走を箭を射る人に差し上げる,あるいは子供の仮り親になってくるように頼む。四川省新津県の場合は,橋の袂でこの儀礼の後に,その路人に子供の名を命名してくれと頼む次第である。又,「跪拜礼」が行われる。

橋は天と地の通路になる。橋は赤ちゃん及び子供の人生儀礼に存在しているだけではなく,成人の人生儀礼にも「難関」と「通路」の象徴の意味をなしている。広西平南県あたりの漢族は避難求吉のため,橋を架ける。この橋を「免難橋」という。占いを通して,自分の悪い運勢が分かったら,前もって「免難橋」を架けると,災難を避けることができる。男性は「免難橋」を架ける時,二本の竹を使う,女性の場合は二本の木で,その上に赤い糸を結び,田んぼの小溝あるいは小河に架ける。このような象徴的な橋は橋を架ける者の災難を取り払うのである。

ところで,各種の「過橋」の儀礼中に不幸と災難を取り払って,ついに幸運と吉祥が求められたことを意味している。台湾南部の王爺醮祭の行事の中に,「過橋」は重要な儀礼である。醮祭式の前日には,「衙門」と「王爺船」の間に法師の祭壇と北斗七星を象った「七星橋」が設置される。「七星橋」は村民の厄払うため,設置されたのである。儀式は紙人形がついた線香を一人ずつ持ってこの橋を渡る(9)。又,台南でよく見られる「童乩」の法事に「七星橋」がその転運の場として重要な位置を占める。言い換えれば,「橋」は人生の転運の儀礼空間で,生命更新の力も持っている。

橋は男女の会う場所

漢民族の日常会話では，男女の交際を助けることを「牽線搭橋」という。この言葉から，橋は男女交際の際に，婚姻と愛情を結び，民俗的な意味も働いていると見られる。

河南省鄭県あたりに陰暦八月十五日の夜では，「走月亮」の習俗がある。この習俗について，紀俗詩がある「乗風走月亮話摸秋，姉妹花叢約伴遊，烏鵲橋辺行去也，不愁無路会牽牛」。このように男女の会う場所は橋の所とする話は，中国の古典文学と民間文学の中によく読める。これは『詩経』に溯ることができる。

古代の中国では，恋人は橋で待ち合わせる習慣があった。『戦国策』，『史記・蘇秦列伝』などの文献記載により，陝西省藍田県東南方五十里の藍峪水には，「藍橋」があった。尾生という男は彼女とこの橋で会う約束であったが，彼女は約束を破って，こなかった。その時に，あいにくの洪水が発生した。尾生はこの橋の柱を抱いたまま死んでしまった。

昔，蘇州では，八月十七，十八の二日間の夜に，上方山にある石湖九環洞橋へ夜遊びする習俗があった。この習俗のお陰で，男女の交際する機会が多くなった。それで，この橋は又「行春橋」とも呼ばれた。

河北省承徳の東北では，天橋山があり，山には一本の石橋がある。この橋について物語がある(10)。物語によると，玉姑という天女は石匠に，もし通天の橋が架けられたら，その橋で天から降り，あなたと結婚すると言い出した。そして，石匠は天橋山に石橋を造った。玉姑を迎えに行って，夫婦になった。

貴州省仁懐の北辺にある大全山と玉蘭山の間に，一本の黒い大石橋がある。この橋は「夫妻橋」と名づけられた。(11)。曾て，玉蘭という美しい娘は大全という男と恋していた。しかし，玉蘭の父親は大全が貧乏なので，その交際に反対した。大全はその差別に怒り狂い，死んでしまった。玉蘭はその悲しみに絶えず，泣き続けて，最後に死んでしまった。玉蘭の父親は二人の遺体を二つの山の谷に埋めた。その後，両谷の所とも一本ずつの柏香樹ができた。二本の柏香樹は不思議にお互いの所へ伸びていって，一本の樹橋になった。年月かけた結果，一本の黒い大石橋になった。この「夫妻橋」に類似する話は，福建省泉州にもあった。「新橋」という橋の袂に二つ大きな岩がある。二つの岩の間に隙間はなかった，「夫妻岩」と言われている(12)。

中国各地に伝わられている民話の中に，橋に関するものは又たくさんある。この点から明らかになったのは，漢民族の民俗想像力の中に，橋は愛情と婚姻の象徴と言える。多くの口誦文学の中では「七夕鵲橋牛郎織女相会」の物語が一番魅力的で，典型的なものである。

七夕民俗と鵲橋伝説

漢民族に伝えられる牛郎織女の悲劇には，「喜鵲架橋」の筋は一番象徴的である。「七夕鵲橋牛郎織女相会」の物語は中国の四大民間伝説の一つである。この物語の由来は長期間に渡って，中

国各地の伝説によって，筋は多少変わるが，どれでも豊富多彩な七夕民俗となっている。七夕の夜は，昔からずっと男女のデートの吉日であった。漢武帝は七夕の日に西王母に会ったと伝えられた。又，梁人呉均の『續斎諧記』により，当時の人々は結婚する時に七夕の日を選んだ。唐の白居易が書いた「長恨歌」にも「七月七日長生殿，夜半無人私語時」という詩句があった。

七夕の民俗では，牛郎織女は愛の神となり，織女は女工の神ともなった。又，鵲橋も男女のデート場所あるいは恋の代名詞となった。『風土記』に宋人陳元靚が書いた「歳時廣記」には，「七月七日，祈川鼓織女，可乞富，乞寿，乞子，但不可兼求，須三年方得」という文が載せられた。

各地方にある牛郎織女の伝説は多様性がある。広東省粤南あたりでは，七夕の日に祭りを行い，牛郎織女の会いを祝う。又，織女を拝み，手先の器用な女になるように願い。七夕では，牛郎織女を拝むことを「慕仙」という。これは独身の少女が主役であるため，「女児節」とも言われる。既婚の新妻はその年初あるいは翌年に自家へ帰り，未婚の友達とともに牛郎織女を拝む，これを「辞仙」という。「辞仙」の礼を行う時に梨を供える，これは離別の意味がある。あるいは赤いゆで卵を用意し，子を求める意味が含まれる。「慕仙」と「辞仙」の儀式が行われるのは，結婚してから，もう牛郎織女を羨ましがる必要はないからである。七夕の日に市場では，紙で作られた可愛い鵲橋製品が売られる。胡撲安が書いた『中華全国風俗志・広東巻』によると，「広州風俗，甚重七夕，実則初六夜也。諸女士海逢是夕，于広庭設鵲橋，陳瓜果，……報一時之甚」。

江浙各地では，七夕の日あるいは七夕の前日には，人々は端午節に子供に飾られた五色彩帯，すなわち，「長命縷」を解いて，屋根の上へ投げる。これは「送健縄」，「換巧」，「鵲橋渡」という。江山，衢州あたりに，屋根の上へ投げるあるいは窓際に置く彩帯は，常に稲穂を結んでいた。これは喜鵲に啄めさせ，牛郎織女のため，鵲橋を架けてくれという意味である。麗水では，喜鵲は屋根に投げた彩帯を天河で橋を架けるため，という説にもあった。

河南鄭県では，七夕の夜に牛郎織女の芝居を演じる，舞台のバックには必ず，天河上に鵲橋が架けられる画がある。総じて，七夕を題材として，各地に伝えられる口誦文学と民間信仰には，いつも鵲橋を，愛情，婚姻及び析嗣とともに伝えている。

香 橋 会

牛郎織女の物語から七夕民俗になった典型的な例は，浙江省嘉興県塘匯郷古竇澤村の「香橋会」である。

毎年の七月七日，古竇澤村周辺十里ぐらいにも離れている村民たちは，「香橋会」のため，古竇澤村に来る。「香橋会」を行う場所は「一担廟」に設置する。「一担廟」というのは，二つの小廟を繋いでいる橋の場所をいう。各村から来た信者は紅，緑の紙で包んだ檀香，線香を十本で一束にして「裏頭香」にし，「粗官香」などの供物を供えて，古竇澤村に集まった。手先の器用な信者は「裏頭香」と「粗官香」で，長さ四，五メートル，幅は約五十センチの香橋を作る（もう一説は廟の住職が作る，「三星橋」ともいう。），「粗官香」で作った香橋の欄干上に，各色の毛糸

で，花模様を飾る。香橋の真ん中に，各家から持ってきた紅，緑の紙で包んだ檀香で，橋亭を作り，橋亭の東西両側に「一年一度七夕会，依依難捨活別離」と「雲影当空両水平，簫笙果何処玉人来」の詩句が書かれている。

香橋は午前から午後ぐらいに出来上がる。その後，各家から紙で作られた黄金元宝錠が送られてくる。これらの黄金元宝錠も香橋の上に飾られる。香橋は人々に観賞されてから，その夜に燃やす。人々は火が消えるまで，香橋を囲み，牛郎織女の再会は自分の捧げた香橋で会ったと信じている。

香橋会の民間信仰では，二点が注目されている：

一，橋を作ったのは男女ともいる。民間の伝説には「紅男緑女」という説がある，だから，香橋会の儀式に使われる紅，緑の紙は男女両性を象徴していると思う。二，檀香は通神のものである。燃やした香橋の意味は単に牛郎と織女に会わせるためだけではなく，又，人間とあの世とのコミュニケーションの役目も働いているし，恋している男女の交際と出逢う機会も与えられる。

仙橋を渡り，喜橋をかける

橋は民間の婚礼には特殊な過度象徴性を持っている。浙江省寧波あたりでは新郎，新婦が結婚した翌日，二人は一緒に新婦の実家へ帰る，これは「回門」という。「回門」の当日，晩ご飯後，実家に泊まらず，新郎の家に戻る。新婦は新郎の家に戻ると，駕籠から新婚夫婦部屋の門まで，数十本の長い椅子で繋いできた「仙橋」が用意され，新婦は新郎の手伝いで，「仙橋」を渡る，これは「走仙橋」と言われている。

もし新婦が仙橋を渡る時に，足もとがしっかりしているならば，招かれた客は更に橋の袂を譬える部屋の門に，もう一本の長い椅子を加え，油の包みを新婦の口にくわえさせ，そして，椅子を乗り越え，これを「鯉魚躍龍門」と称する。この「走仙橋」の儀式は前日の結婚式に行われた「伝袋（代）」の儀式とほぼ同じである。「走仙橋」儀式中の橋は室外から新婚夫婦部屋までの間を結ぶ通路であるだけではなく，女の家と男の家の間を結ぶ通路でもある。これは，婚姻の「合両性之好」の意味に十分に合った。陝西，河南などの農村でも類似の習俗がある。中国北方各地の婚礼では，昔，新婦に馬の鞍を乗り越えさせる習俗があった。これは橋を渡って，夫の家に入る習俗の変遷と思われる。

広西恭城地方に住む漢族の婚礼では，「架喜橋」の習俗がある。結婚式に近づくと，新婦の家から新郎の家へ行く道に小溝を捜し，この上に松の木で，橋を架ける。橋の両側に赤い布を飾って，赤い紙を貼り，橋の上にコインと飴玉を置く。これが「喜橋」である。

浙江省の紹興城内では，「五福」，「大慶」，「万安」，「福祿」など縁起のいい橋の名が付けられている。紹興の人々は昔，結婚式を挙げる時に，必ず，三本の橋を渡ってから，新婦を迎えに行く。橋を渡る時，爆竹を鳴らす。新婦に乗せられた駕籠はもと来た道を辿って，新郎の家へ戻らなければならない。又，無錫あたりに，駕籠を使わず，船で新婦を迎えに行っても同様，三本の

橋を渡らなければならない。

漢族の民間婚礼では,新婚を迎え,橋を渡る民俗の由来はずっと昔から伝承されてきた。『詩経・大明』に「親迎于渭，造舟為梁」という句が載せられた。これは新婦を迎えるため，浮き橋を架けた意味であった。

泮池之橋

漢民族の民俗では「洞房花燭夜，金榜題名時」という説がある。結婚は「小登科」とも言う。橋は「小登科」に登場するだけではなく，本当の科挙及び相関する文化現象にも登場した。

北京孔廟（国子監）の辟雍泮水に橋があり，その南に木で組み立てたアーチには「圜橋教澤」と書かれた。中国各地では，泮宮あるいは泮池上に架けられた橋は「泮池橋」あるいは「状元橋」と言う，かれらは文廟建設の中の重要な部分である。

広西恭城文廟の泮池（月池）に状元橋がある。この橋は状元しか渡れない。橋上に雲紋が刻まれた青石がある。科挙の試験をパスし,「青雲之上」に乗ることを意味している(13)。西安文廟曲阜孔廟及び南京夫子廟でも，泮池橋あるいは文徳橋がある。封建時代に下流社会にいる知識人は上流社会に登っていく場合は，科挙の試験を通し，橋を渡るしかない。要するに橋が下流社会と上流社会を隔ている。

浙江省寧波定海県城へ行った人は「状元橋」を知らないのはいない(14)。中華民国二十七年（1938年）にこの橋が建て直された。当時，橋の真ん中に，神龕が設置され，落成式に大勢の人が集まってきた。この橋は宋淳熙十六年県令王阮の在任中に造られた。橋に「人従橋上行，状元此時生」の十文字が刻まれたため,「状元橋」と名づけられた。この橋ができるまで，定海には科挙の試験にパスしたものは一人もいなかった。しかし，明洪武二十六年，定海人張信と定誠甫は「応天解元」に受かった。そのため，定海城では一本の「解元橋」が造られた。地元の人々は科挙の試験に成功した要因は「状元橋」のお蔭と信じていた。

中国各地方では,「状元橋」と名づけられた橋はたくさんある。科挙時代には，状元の出身県ではこの名誉を記念するため，木で組み立てたアーチ（牌坊），橋梁などが造られた。福建泉州洛陽橋の伝説では，蔡母は災難に見舞われた時に，神様に願をかけた。そして，息子蔡襄は状元に受かった。その後，蔡襄は母親の願いに従って，橋を架け，百姓を援助したという筋の物語である(15)。名誉利益と繋がっている橋の物語は「過橋米線」という民間伝説にもあった。

迎送之橋

橋は中国人の人生の中で重要な過程を意味している「洞房花燭夜，金榜題名時」に関わっている。ところで，橋はまた人生の生離死別の感傷と久しぶりの再会の喜びにひたる所でもある。橋は中国の詩画に常に感傷的な場面あるいは再会の場所として描かれた。これは橋が連結と分界の

境界性を持っているためである。

橋の袂に見える出迎え，送りは，橋の空間の境界性，時間の開始と終結も含まれて，民俗文化とともに存在しているのである。

送迎之橋に関わる記載は歴史上では“灞橋折柳”が一番有名である。『古今図書集成・職方典』の記載によると，漢灞橋は長安城東二十里の灞店にあり，西京へ行くものをここまで見送りし，柳を折って手渡し，「銷魂橋」とも呼ばれた。『陝西通志・西安府』に「灞橋，漢時送行者，至此折柳贈別，又呼為銷魂橋」，『三輔黄図・橋』にも“送客贈柳”のことが記載され，「折柳橋」とも名づけられた。

灞橋で柳を折り，相手に送る習俗は両漢から始まって，唐宋の頃に一番盛んであった。唐詩の中にも“灞橋折柳”を詩句に入れて，離別感傷を表現する作品は少なくない。宋代詩人柳永の詩に「参差烟樹灞陵橋，風物尽前朝，哀揚古柳，幾経攀折，樵悴楚宮腰」と書かれていた。

橋の袂に柳がある風景は昔から現在まで伝わってきた。だから，人々は橋の袂に柳を植えることになった。金代の赴隷文が書いた『盧溝詩』に「落日盧溝橋上柳，送人幾度出京華」という風景が描写された。この詩から分かったように金代から北京ではこの習俗はもうすでにあった。雲南昆明の八景では，長安にある垻橋烟柳を模倣した景色がある。四川省成都城の北では昔，駟馬橋（升仙橋）があった。この橋の袂では客を見送る場所が造られた。貴州省恵水では迎恵橋があり，明代から番州（恵水）の地元紳士官員はこの橋の袂で，番州に赴任する役人を出迎えした。離任の時にもこの橋の袂で，見送りした。又，橋の袂に離任者のため，碑を立で，政績をその上に刻んだ。これはこの地方の伝統となった。

江南水郷地方の場合は普通，橋の袂に客を出迎え，見送りする。華南各地の農村では，村の人口にはほとんど「水口橋」がある。この「水口橋」も上述のように客の出迎え，見送る場所である。このような人の目に引かない習俗の裏には深い民俗原理が支えていると言える。

水口橋

「水口」というのは，村の入口にある渓流の所を指す。しかし，一般的にいえば，村の入口を言う。中国南方各地では，風水学説の影響で，水口は村に対して重要な位置にある。普通，水口の所には，水口橋，騎路亭（あるいは魁星楼），風水樹などがある，独特な水口風景になる。

水口橋の存在は村外と村内の分界線になり，村外と村内の連結点にもなる。これは橋の境界象徴性に基づいて発生した結果である。水口橋の役割は村内の風水龍脈と財運を水に流さないようを守る。又，村民たちは村外にある不安の世界から橋を渡って，馴染んでいた安全な村内に入るという心理的な防御効能がある。村落の水口処にある建築物は常に防御と鎮守の意味をする。

安徽省徽州祁門の奇嶺村では，水口には渓に跨る水口亭が建てられた。これも水口橋の代わりと思う。歙県西郷古橋村水口では観音橋という小橋がある。昔，曾て橋上に観音様が置かれたため，名づけられたのである。祁門桃源村の水口には廊橋があり，その中に碑がある。碑文に「而

斯橋伝，為千古不易之津梁矣，何其壮哉」云々と書かれた。文中に橋の「千古不易」が書かれたが，言い換えれば，村の「千古不易」も意味していた。村の人脈にも関わるため，この水口橋の造りの華麗さが想像されるだろう。

浙江省蘭渓市殿山郷桃村，麗水市新合郷堰頭村ではどっちにも典型的な水口と水口橋がある。桃村の水口橋の近くに昔，祠堂が建てられた。堰頭村の水口処では水口橋，風水樹，魁星樓のほかに水口を守る石獅，石虎が置かれた。これは化け物と災難などを村外に追い払うためである。

畲，侗，壮などの少数民族の部落の村口でも，水口橋などの配置がある。麗水市龍江郷山根村（畲族）の村口では，水口橋と風水樹のほかに，水口橋辺に水口殿が建てられた。村民たちは水口にある橋，樹と殿が村の風水と時運に関わると信じているからである。有名な侗族風雨橋も侗族村の寨口水渓上に架けられた。侗族風雨橋の位置と侗寨にある風水龍脈の説から見ると，風雨橋にも水口橋と同じような役割がある。

橋に集まる市場（橋市）

橋の両側に住む住民にとって，一番近い集会場は橋といえる。中国各地方では，このような集まりの場はたくさんある。

橋市というのは橋の袂にあるいは橋上に大勢の人が集まって，商売をしたり，市場の形になることを指す。宋人張擇端の画『清明上河図』に当時，汴京南郊にある橋市の賑やかさを描いた。『東京夢華録』の記載により，東南方にあるものは全部こっちから京城に入るのである。ところで，橋市は庶民生活に便利だが，交通状態を妨害したため，天経三年，詔書の明文で百姓が汴京諸河の橋上で商売するのが禁じられた。元代，イタリア人マルコポーロは中国に来た，彼が書いた『東方見聞録』の中にも成都地方の橋市，橋関についての記述がある。

湖南醴陵渌江橋，明代成化九年に立て直された時に，橋辺にある店の建築が許可され，橋と並んで店が開かれた。万暦三十四年，もう一度建て直す時，その近辺の店は百軒に近い。これは貿易を繁盛させるためである。清代になると，橋の上に板で亭を建て，数十軒の店ができ，橋上で商売をした。

浙江義烏の東江橋は清代に建て直されてから，橋市は曾て盛んになったが，光緒二十四年に明文の公布で，橋上に「豆腐」，「涼粉」，「点心」，「焼餅」，「饂飩」などの商売が禁じられた。又，橋上の賭博，付け火，乞食，宿泊なども禁止された。このように橋，橋屋，橋廊，橋亭これらの所は庶民交流と貿易の場である。しかしながら，官府の禁止令から橋市の無秩序もわかる。清代，福建県延平にある祥風橋でも，「橋屋画棟長梁，中多列肆，互通有無」という記載がある(16)。

有名な橋市の名を挙げれば，南京武定橋，飲虹橋あたりの屋台と広東潮州湘子橋上にある貿易市場などがある。潮州では，「到潮不到橋，白到潮州走一遭」という俗語が流行っている。又，橋郷紹興では，橋梁は商店と工作場の繋がる場になったので，橋の名は商売に相応しい「進利橋」，「金鼎橋」などと名づけられた。浙江省奉化では，ある商業センターの名は「大橋」といい，こ

れは橋市の盛んになるとともに名づけられたのである。奉化地方には「前世修到奉化大橋」という俗語があり，婦女たちも豊かな大橋鎮の嫁になれることを，夢みたのである。

中国各地方の橋市は昔から今までずっと盛んである。西北と西南地区では今でも「日中為市」といういい方がある。その自由貿易の形は橋上，橋の袂から展開されたのである。人口の密度が高い東南部地区では，交通安全の面にも配慮されたため，橋上で商売するのは禁止されている。それで，橋の袂の両側が市になるのがよく見られる。

葬儀民俗に関する橋

橋は人生の生，老，病，死に深い関係を持っている。世の中の名誉，利益などにも屢々，関連している。だから，人生は橋渡しの如くとは言える。橋は人生の険しい道のような存在であり，人生の経過期に必ず，渡る道でもある。更に人生の中で最大な峠であり一番重要な過渡儀礼は生と死の間にある。誕生はあの世から橋を渡って，この世に来ることを意味している。死亡は霊魂がこの世から橋をわたり，あの世へ行くことを意味する。

漢民族の葬儀民俗には橋の象徴あるいは象徴性の橋もよく見られる。黒龍江省東部では葬式の行列はもし途中で橋梁に逢ったら，必ず，橋を祭ってから渡る。四川省川東と川西の漢民族農村では，棺桶を墓地へ持っていく時に，遺族の「孝子」（父母の葬式の喪主）たちは手で帛をつかまえ，楽器を鳴らしながら墓地へ行く。橋に逢ったら，まず，行列を止めさせ，遺族の一人は橋の側に線香，蠟燭を立て，河水神霊を祭り，爆竹を三回鳴らしてから，橋を渡る。この橋の袂を祭る儀式は地元の人に「祭河伯」と呼ばれた。雲南地方では出棺する途中に三回の「搭橋」儀式が行われる。橋を架ける時にまず，棺桶を止めさせ，直系の遺族は順番で棺桶を乗り越え，それから，又，順番で棺桶の前に跪く，そして，体が地面に俯せ，棺桶を体の上に通らせる。それは出棺する途中に河溝に逢った，孝子たちは自分の身で橋の代わりにして，亡くした親類の霊魂を無事に渡らせたという意味を表わしている。

江蘇省南京，たくさんの出棺行列の儀式の中に必ず，「影橋」と「影亭」がある(17)。太湖南の浜の農村及び城郊にある水郷では，もし年寄りが亡くなったら，娘あるいは嫁さんは泣きながら村内外にある三本の橋を渡らなければならない。それから，子供にコインを入れた茶碗をもたらし，橋の袂まで行かす。そのコインを河に投げ，水を「買って」持って帰る。それは死者がお金であの世の水を買ったという意味をする。杭州市区の葬儀では，死者の洋服用品などを長い箱に入れ，「千金帯」で縛り，孝子たちは一本の秤で，それを担いで一本の橋を渡り，村外一周してから帰る。又，寧波，台州などの地方では出棺行列はもし，橋梁に逢ったら，孝子は橋の前に跪くあるいは先に橋を渡って，橋の向こうで跪いて棺桶を迎え，棺桶が通ってからしか上がれない。余姚あたりでは，孝子たちは橋上にて棺桶の下を這い通す習俗がある。これは「不圧棺材杠」という。橋の神を尊重するためである。紹興地方では，名望な家族が出棺する時に，棺桶に乗せた船が通過する橋梁には青い松，竹，紙の花が飾られる「牌楼」を作り，死者の冥福を祈る。福建

県泉州では，出棺行列の遺族は道端に紙銭を置きながら歩いていき，橋梁に逢ったら，「金銭」を橋上に置く。これは土地公と橋の袂の将軍に「買路」するためである(18)。温陵あたりでは昔，盂蘭盆会を行う場所は新橋，車橋などに設置した。これは橋の所に溺亡者が多いからである。

葬式と葬儀にある「橋」の存在意味は各地方でさまざまの習俗がある。総じて，家から墓地まで，要するに陽宅から陰宅まで，常に橋梁に逢って，橋袂を祭った，橋を架けたり，あるいは橋を渡り，水を買うなどの儀式が行われた。これは河神と橋神を祭って，無事に橋を渡れるよう，それとも親類はあの世へ行くため，生死と密接な関係を持つ「橋」の説を信じているからである。

奈何橋

漢民族の葬儀では，最大の橋関は地獄の所に架けられた奈何橋である。奈何橋の意味は仕方がなく渡らざるを得ない橋のことを言う。

オーストリアのウィーデ教授 Proffessor Paul Vidor は民俗画巻『十殿閻王』を，台湾の国立歴史博物館に贈った。これらの画巻は台湾と浙江あたりの葬儀で，道士が死者の霊魂を済度する時に使う道具で，この上に地獄にある奈何橋の像を描いていた(19)。死者の霊魂を済度する時に十殿閻王の像が架けられている習俗は浙江省の中，南部地区にはまだ，残されている(20)。

台湾南部の紅頭法師の「打城」儀式の最後に行われるのが「過橋」である。この儀式の中に紙で作られた橋が奈何橋（あるいは善悪橋という）である。ある道士の解釈で，死者は七日おきに一回家に帰って，道士が唱える「功徳」の経を聞く。それで，奈何橋は死者を家に帰らせるための通路なった。

福建省と広東省の客家人は葬儀には死者のために行う「功徳」の一つは奈何橋を作ることである。これは空地に長い椅子と「八仙桌」で，繋がった橋である。「八仙桌」に白い布で橋の欄干を作り，布の両側を結んで橋の門になる。橋の袂の両側には紙で作られた牛頭馬面を立たせ，橋を守る様子が作られている。橋の後ろの両側には同じく紙で作られた人形が飾られた。これは金童玉女で，出迎えの様子が作られている。儀式が始まる時に法師が橋の袂に「目連救母」の物語を誦唱する，遺族全員は橋の両側に座り，紙の銭を燃やす。それから，法師は手に帛を持って，奈何橋の様子を唱え，孝子たちは紙橋に跨る。死者の霊魂を橋に渡せる儀式はこのように七回繰り返し，そうでなければ，死者の霊魂を陰間へ送ることはできない。広東梅県あたりでは，人が亡くなったら黄河を渡ると信じている。「唔過黄河心唔死，一過黄河死了心」という俗語がある。しかし，黄河を渡るため観音様にお願いしなければならない。しかも河を渡ってから，又，たくさんの難関がある。これは「悪狗関」，「鬼門関」，「望郷台」，「奈何橋」など。この奈何橋は生前の無罪の人々は渡れるが，罪がある人は悪鬼に橋の下に連れ出される。地元では，「十拜」という長い歌が伝わっている。その歌に「九拜拜到奈何橋，奈何橋下水滔滔，行善之人橋上過，造悪之人水上漂」と歌われた(21)。

西北にある青海河湟などの地区では，昔，漢民族の葬儀に「升幡搭橋」があった。これも死者

の霊魂を，奈何橋に渡らせる儀式である。出棺の前日，喪主は棺桶の前に机を設置し，机の上に水を入れた洗面器，木の櫛，鏡などを用意し，洗面器の中に七枚のコインと七個の棗を入れる。霊堂の外ではもう一つの机を設置し，「橋木」を机の上に架ける。出棺の時間になると，陰陽生から死者の位牌に象徴的な沐浴をし，髪の毛を解く，鏡を見るなどの冥装の礼をする。その後，橋を架け始める。四角机の四隅に四つの面燈を点ける，その真ん中に一つの洗面器を置き，中に板を置き，板の上にも一つの面燈を点ける。それから，陰陽生は「引魂幡」を振り回す，「指路経」と「開路経」を唱える。このようにして死者の霊魂が無事に奈何橋を渡り，陰間へ行けると地元の人はそう信じている。四川各地の漢民族の葬儀には，喪主は亡親に沐浴し，洋服を着替えさせ，そして，死体をベットの上に置き，ベットの下に燈を点ける。この光は地獄へ行く道を照らし，死者の霊魂が奈何橋を渡る時に「血河池」に落ちないようにである。『江津県志』風俗巻にも，「過橋燈」の習俗について記載された。

山西省北部地区では，葬儀出棺を「発引」と呼ぶ。死者の霊魂を引導するための意味である。出棺行列の儀式には「招魂幡」と紙で作られた「金童玉女」がある。民間には「金童引過奈何橋，玉女送上南天門」という説がある。

各地にある漢民族に関する奈何橋の説はそれぞれである。ある説には，陰間では奈河があり，その上に架けられた橋は奈何橋。別な説には，陰間へ行く途中，「血水池」あるいは「血河池」があり，その上に架けられた橋は奈何橋。あるいは奈何橋はすべての霊魂が渡らなければならない道であり，生前に行善したものは無事に通れるが，行悪したものは橋の下に連れ出される。それとも，閻王が審判する日に，悪人は奈何橋を渡らせながら，橋下に引っ張られる。善人は金橋と銀橋を渡せる。様々な説の中から明らかにしたのは奈何橋は絶対に悪人に通過させない関であるということである。

金橋と銀橋

陰間地獄では奈何橋以外に又，金橋と銀橋がある。一本の橋という説もあれば，二本の橋という説もある。これを「金銀橋」と称したのもある。ところで，金橋，銀橋あるいは金銀橋は生前に行善したものに通過させるのが共通の説である。かれらは冥界にある幸福の地あるいは天堂の地に繋がっている橋梁でもあり，再び貴人の運命に転世する橋梁でもある。

金・銀橋に関する俗説は中国の各地方ではどこにもある。黒龍，吉林，遼寧などでは，葬儀の時に孝子たちは麻で作った服を着，馬の鞍を背負い，口に「馬嚼頭」をくわえ，二本の作り橋の上に這って渡る。これは亡くなった親類は自分の背中に乗せ，陰間にある金橋，銀橋へ送ることを意味する。金橋と銀橋は死者の霊魂を福禄の地，天堂へ送る通路である。

昔，北京などの，葬儀民俗には「焼船橋」がある。船と橋というのは紙で作られたもので，大きさと手作業の細かさに拘らない，死者の背景により，多少違うが，橋は船より小さいのが普通である。しかも，必ず，黄金色の金橋と白い銀橋がある。橋上に紙で作られた手に「引魂幡」を

持っている金童，玉女が飾られる。その役目は死者の霊魂を引導するためである。人が亡くなってから，六十日目に，陰間にある奈河を渡らなければならない，もし「船橋」がなければ，河の中に落ち永遠に転世することができない。それで，喪主はこの日に「船橋」を燃やし，亡くなった親類に船と橋を送るのである。「焼船橋」を燃やす前に僧侶がお経を唱えながら，「船橋」を送る。「船橋」を送る時間は午後の三時から日が暮れる前の吉時を選び，その時に，遺族は「船橋」の回りに船が動ける，橋を渡れるのを意味をする少しの水をまく(22)。

河南省林県あたりの葬儀では，死者のために作った「送老枕」の上に「走金橋，過金橋，更鶏叫，鳳凰聴，金童玉女打鈔燈」を題材として作ったものが多い(23)。四川各地では，死者のために行われる儀式には，「破獄」というのがある。これは深夜に行い，法師は門の前に長い椅子で「金橋」を作り，救苦天尊の模様にし，死者の霊魂を地獄に落ちず，金橋を渡らせ，天堂へ行けるようにする儀式である。

浙江紹興などでは，転ぶ，溺死，首つり，難産など非正常死の場合には，「翻九楼」という儀式を挙げる。この儀式にも「走金・銀橋」の場面がある。その机は橋の象徴である。この儀式を挙げてから，非正常死の死者の霊魂は「枉死城」に入らなくていい，金・銀橋を渡って天堂に入れる。武漢あたりでは葬儀出棺の時に孝子たちは大門の両側に跪き，頭は白い長布で覆う，これは「搭橋」という。搭橋者は棺桶が通過してからしか立ち上がれない。

香港の道士は「過金・銀橋」の法事を行う時に模型橋上に「引魂幡」を立たせ，上には「西方接引」と書いている。金・銀橋の間に家鴨を繋いで，橋燈を点ける。台湾の場合には，生前行善したものに用心棒が付き添って，金・銀橋を渡り，西天へ行く習俗がある(24)。

橋の落成式（踩橋）

曾て述べた橋の象徴性と象徴性の橋のほかに，漢民族の橋俗文化では，橋自身の民俗として，例えば，橋の建築工事に関するものもある。

橋の土木工事の始末では，欠かせない儀式がある。杭州市内では，橋を造る時にまず，村中の名望者が天地を祭る。祭りを行いと同時に石匠の道具を机の上に置き，三牲，お酒，お茶，各種貢ぎ物を供え，石匠が「万古千年」，「行人安全」など縁起のよい言葉を言う。儀式が終わってから，橋の工事が始められる。四川では，昔，橋の工事に着工する時に線香，三牲などで，魯班を祭る。責任者は工事の無事，神様が守ってくれるようなどを祈る。それから，雄鶏を殺し，血を米に撒き，工事現場を一周してから，工事が始まる。

工事に着工する前の祭りと敬神の儀式では，主に工匠業の神様，魯班と橋梁工事の土地神様を対象にする。ほかには橋造りに邪魔する地煞と水怪を鎮圧する儀式などである。

橋梁の工事が完了後，「踩橋」の落成式が挙げられる。踩橋は「踏橋」ともいう。四川各地では，踩橋式が行われる前に橋の通過は禁止され特に婦女，妊婦の通過は禁止される(25)。踩橋の式は吉日とよい時を選び，その日に誕生日である人，賢い人，地方の文人名望者などを先に渡らせる，

これは長寿富貴の意を取り，貴人と文曲星の臨席を象徴するためである。もし，踩橋の日に新郎新婦の駕籠あるいは新任の役人，科挙の士子などに橋を通過させたら，もっとよい。踩橋の儀式は午前の吉時に行われる。その時，郷民たちが集まり，石工と大工は橋の袂に線香を立て，橋の袂にいる土地の神様に感謝する，そして，塩，茶，穀物などを四方へ撒きながら，咒語を唱える。それから，鶏を殺し，この血を橋上に撒き，鶏の毛で血をつけ，橋の欄干につける。これは煞を払うためである。踩橋に参加する者は赤い綢を身に付け，橋を渡りながら，吉祥の句を言う。その内容は「新橋今日喜修成，披紅踩橋賀四隣」，「橋身永固清江上，百事順逐人財旺」などである。踩橋儀式の後，郷民たちは一斉に橋を渡り，鼓楽を演奏しながら，爆竹を鳴らす。

踩橋あるいは踏橋の儀式ではまず，指定された人を通らせてから，一般の人を通らせる。このような落成式は中国の各地ではよく見られる。貴州鎮では「祝経橋」という名の橋がある。この橋について，仙人張三豊は毛石料で「龍門石」として，二心を抱く知事の踩橋儀式を被った物語である(26)。龍門石は橋の真ん中にある橋梁を合わせる石である。この石は橋梁の落成式では特別な象徴性を持っている。この石について，もう一つの伝説は北京頤和園にある十七孔橋の物語がある。皇帝様は「賀龍門」に来るが，工匠たちは立派な「龍門石」をどうしても作り出せない。最後に，魯班が天から立派な龍門石を持ってきて，工匠たちの難題はやっと解けるようになった(27)という話であった。

浙江各地では，新しい橋が完了してから，「圓橋」の式が行われる。これは踩橋儀式の一種で，地方類型である。潮州あたりの「圓橋」式は吉祥を願うのが主な目的である(8)。新しい橋が完成した時に橋の真ん中に一尺平方の孔をわざと開け残し，又，その孔に当て嵌める石を用意し，石の上に模様が刻まれた。これは「橋梁石」（龍門石とも言う）である。吉日よい時を選び，「圓橋」の儀式を挙げる時に，家庭円満，体が丈夫，人気がある老夫妻を捜す。当日に老夫妻を先に橋渡させ，爆竹を鳴らしながら，老夫妻から橋梁石を孔に当て嵌めてもらう。そして，橋梁石の上から踏んで渡す。圓橋の儀式を挙げる意味は新橋の末永きを願うためである。橋を造った工匠たちにとっては，橋の完成というのは圓橋儀式が挙げてからしか言えない。杭州市郊では，新橋の落成式後，「圓橋酒」というお祝いをする。圓橋儀式は結婚の「圓房」儀式と同じような象徴がある。子と孫とも持っている「全人」から圓橋の礼をするのは，その生殖力を新橋にも貰ってほしいためである。圓橋儀式の時に橋に生命力を与えた。この生命は儀式を通じて永遠に延びてほしいのである。

橋神と橋鎮

中国の南方各地の説によると，橋の袂にあるいは橋の下に橋神がある。浙江省嘉興では橋の上に橋亭を設置し，橋神を祭る。船は橋の下に通る時に，話すことも禁止される。そうでなければ，橋神に怒られる。それで，このような橋を「唖子橋」と呼ばれる。寧波では，船頭は橋の下を通る時，必ず，橋神に祈る。紹興の場合は節分の時に老婆が橋梁の堅固と歩道者の安全のため，橋

上に，線香と蠟燭を立て，紙銭を燃やし，橋神を祭る風景がよく見られる。

ところで，橋神の神格ははっきりしていなかった。中国各地では，統一された橋神はないと言える。台湾で出版された『中華民俗版画』の中に一幅の橋神図が載っている(29)。その画には神様が着ている服は将軍服に見える，手に一本の花が持たれ，橋上に座っている，一人の童子は手に本を持って，その右側に立ち，左側には長い髭がはやしたものが立つ（橋神図を参照)。本の解釈によると，この図の橋神は一体誰なのか，もう不明である。もしかしたら，南方民俗中の棺桶が橋梁に逢ったら，必ず，橋神を祭るのと関係があるかもしれない。

『三輔黄図』によると，秦始皇は渭橋を造る時に，力士孟賁之の像を石に刻んで，これを祭った。それから，橋を造る時に必ず，孟賁之を祭る，ついに彼は橋神となった。又，『括地志』によると，長安渭水上にある横橋上の北に神像が置かれた。南京桃葉渡では「利渉橋」という名の橋がある。地元の人々は橋を造ってくれた金雲甫を橋神にした。このように民間各地では，百姓は常に橋を造ってくれる者を橋神として祭っている。

橋神以外に，漢民族民間の伝説では橋梁を守る神及び周辺の諸神は，又，河神，水神，龍神，海神などがある。明代には蘭州に鎮遠橋があり，橋門西側にはある祠に河神が祭られる。泉州洛陽橋，橋の北に昭恵廟がある，この廟は海神廟である。河南頂城の宋橋の袂に曾て，廟があり，水神が祭られた。浙江省浦江あたりの石拱橋の袂には禹王廟が建てられる。これは大禹が治水の功臣であったため。貴州真豊にある花江鉄索橋の側に観音様の石像のほかに龍王宮がある。

ところで，仏教系統の神様も橋の袂にあるいは橋上に祭られる。福建永春の通仙橋には長廊，橋屋がある，橋屋の真ん中に仏龕が設置され，観音様の像が祭られる。福建泉州の平安橋はその長さで有名で，橋の両側に石塔と石仏像が置かれ，橋上には五つの亭がある，亭の中にはほとんど菩薩様が祭られる。橋上あるいは橋の袂に仏教諸神を祭るのは，橋の実用性を現役してもらうとともに，又，若海衆民を救うための象徴的な意味もある。そういう意味で，橋は仏教信者から寄付したお金で造られたのもたくさんある。

漢民族民間伝説では龍が九つの子を生んだという説がある。物語によって，その六番目の子は虬蝮であり，水が好き。橋柱上に刻まれた怪獣は虬蝮とも言われている。もっと一般的な言い方は螭は龍の一種で，「吸水獣」，「戯水獣」とも言われる。この怪獣は洪水を飲み込めるため，橋の欄干，柱の頭にあるいは龍門石上に飾られる。

河北赴州橋上に刻まれた龍頭の彫刻は「吸水獣」の形象化だそうだ。南京郊区にある七橋瓮石拱橋では橋の柱には一本ずつに鱗がついた水獣が彫刻された，これは螭龍である。龍は水族の王とも言われている。螭龍は洪水と橋下の水族たちを管理すると民間には云われている。橋を守っているものを挙げたら主に犀牛，獅子，石敢当，華表，経幢と「橋鉄」などがある。

『異物志』に犀は水を破れると書かれた。五行理論により，牛は土に属し，土は水を剋する，だから，中国ではずっと昔から犀牛を鎮水神獣として扱われている。北京頤和園の十七孔橋，河南開封にある鎮水橋，四川瀘定橋などでは皆，橋の袂に鎮水の銅牛あるいは神犀を設置した。

橋の神

橋を造り，善行をする

漢民族の橋俗文化の中では，橋工事の始末に，各種の宗教儀式が行われる。しかも，橋梁自身も諸神や諸仙の集まる所である。更に広い意義から見ると，橋を造ることは一種の宗教行為と言える。

仏教が中国に伝わってきてから，仏教の信者が大衆へ宣教し，引導するために，橋を造るという気風が盛んになった。だから，出家の方は橋を造るということを，大衆を引導し，功徳をする一つの手段と見なしている。仏教信者が橋造りを通し，大衆を引導し，自分も済度する。それで，橋を造るための募金活動が出家の方に対して，功徳善行をしているような存在である。しかも，橋は「慈航」とも称した。

ところで，中国のどの地方の地方志を読んでも，橋梁及び橋を造る者に関する事績はかなり書かれた。この面から橋造りと善行観念が民間では普及されたことを明らかにした。地方志に記載された橋梁に関する資料は以下の数点にまとめられる。

まず，橋を造り，橋梁を建て直し，橋を造るための募金などは中国各地では，善行，義行と見られる。彼らの事績は碑文にしたり，名前が橋の名に命名されたり，地方志に名が載せられたり，人々に尊敬される。このように橋を造ることはすばらしい行動だと人々に思われる。一種な重要伝統でもある。

次の点は，橋造り，橋を造る者の動機はそれぞれだが，郷里に幸せをもたらし，自分あるいは子孫のため，善行をし，徳を積む。しかも親が橋を造れば，子あるいは同一家族の代々が同じ橋を修繕する。それは，橋梁は一家族の人口数や壮健かどうかなどに絡んでいるためである。

河南夏邑にある班家橋は父が造った，子が修繕し続いていた例である(30)。このような例はたくさんある。河南項城では，蔣橋という名の橋がある(31)。橋の所に立てられた碑が壊れたため，橋の由来ははっきり分からないが，邑人張三宝がこの橋について，次のように述べた。この橋は蔣氏が造ったに間違いない，なぜなら，この橋の名から判断できる。しかも「蔣君丕昌，邦治等，因慨然曰，橋姓吾姓，即吾家之橋也，吾族附橋居者余戸，忍坐視橋之就圮乎」云々を言った。そしたら，蔣氏一族はお金を集めて，橋を建て直したそうだ。

その次，各地方志には，又，橋を修繕した者がよい結果になった実例が記載された。『許昌県志』の記載により，明代には許昌では，邢登高という人がいた。彼は一生にたくさんの橋を造った，そして，その子孫は科挙に成功した者がいた。これは徳を施した恩返しだと思われる。橋造りの善行者に最大の因果応報は子孫に福の果報を授けてもらうことである。山西『霊石県志』巻九に記載されたのは，地元では，橋作りの善行者はたくさんいた。この中に王立報という人がいた。彼は村の西に橋を造った，村民たちに感謝され，村民から「修橋済衆，后其子孫」と書かれている扁額をもらった。福建省の同安，光澤の地方志記載により(32)，橋を修繕したため，子孫満堂になる例もたくさん挙げられた。

橋を造り，善行をする民俗観念と行為は，中国各地方ではかなり見られる。又，橋上，橋の袂

に亭，座が設置され，燈を掛け，ご馳走を用意し，往来旅人の安全を祈る風俗がある。大雪が降った翌朝では早起きな者は先に橋上の積もり雪を掃除するのも屢々いる。江浙あたりに，河の下流に住む郷民は橋の板が水に流されるのを見たら，その板を拾って，元に戻す。これも徳を積む，善行の行為である。台湾では，もし橋の板を盗んで，人に見つけられると，その板を背負って，村内を回り，見せしめの処分をする(33)。

重要なのは橋梁自身は一種の宗教的な行為も含まれていることである。完了された橋の修繕も宗教の力を借りなければならない。昔，四川各地では，人々は大，中型の橋梁の側に廟を建て，僧侶を廟に住まわせ，廟の収入を，橋梁の維持費や管理費に使う。ちなみに，又，余っている管理費や維持費から，産業などを経営し，財団法人の資格になり，橋に自己維持の生命力を与えるようになる。

初歩的な結語

漢民族の橋俗文化について，本稿にはいくつかを述べたが，粗述ではあるし，触れていない面もたくさんある。例えば，中国古代の橋政，民間各地にある「橋会」の組織，口承文芸中に触れられた橋の救難象徴性，橋は天に繋がり，神，仙，鬼などに通じる，橋占いの風俗など様々ある。これらは今後の研究課題にして置きたい。

ここで，漢民族の橋俗文化を概述してから，新しい比較民俗研究の課題が見えてきた。まず，漢民族と少数民族の橋俗文化についての比較研究である。少数民族の橋俗文化と言えば，例えば，朝鮮族の「踏橋」，苗族と侗族の「架橋」祭りと敬橋節，景頗族の「過草橋」，瑶族の「功徳橋」など。これらを漢民族の橋俗文化と比較したら，お互いに補足することができる。次に中国，日本，ヨーロッパに至るまでの比較研究である。例えば，日本の「渡七橋」の風俗は中国の「走橋度厄」とよく似ている。日中両国にある橋俗では，橋市，橋占い，三代夫婦の初渡式やら橋の勧進，供養などを比較しながら，中世ヨーロッパでは，教会を背景にした「橋梁建設兄弟会」などに辿ってみることもできる。橋造り，善行をし，大衆を引導するのは西洋であれ，東洋であれ，どっちでも似ているし，宗教原理の一つと思う。ところで，もっと，視野を広げて世界文化の背景から，漢民族の橋俗文化を再認識しなければならないと思う。

橋に関する民俗への我々の認識は未だ不十分である。ところが，今まで，認識してきたものから，漢民族にある橋俗の象徴に初歩的な帰納をしようと思えば，できないわけでもない。

神界（あるいは陰間）⇦　橋　⇨出産
病気，厄，災難⇦　橋　⇨回復，平安
男人⇦　橋　⇨女人
貧乏知識人⇦　橋　⇨名誉，金銭
迎え⇦　橋　⇨送り
村内（安全）⇦　橋　⇨村外（未知）

買う⇦　橋　⇨売る

矢印で上述した橋の過渡性を記した。更に抽象的なレベルへ辿っていくと，次のような過渡象徴性がある。

天　⇦　橋　⇨　地
神　⇦　橋　⇨　人
仙　⇦　橋　⇨　人
鬼　⇦　橋　⇨　人
聖　⇦　橋　⇨　俗
死　⇦　橋　⇨　生
あの世　⇦　橋　⇨　この世

このように数千年に渡った漢民族の橋梁発展史から，逐次に橋の民俗が醸成された。人生の生老病死から名誉利祿まで，愛情，性，婚姻から信仰に至るまで，橋俗の中では漢民族の歴史と文化の基本層面が触れられた。しかも，この中には漢民族の民族性と価値観も含められた。最後に，漢民族の橋俗文化に関する研究は比較民俗学ないし漢学の研究に参考にされることが私の望みである。

注

(1) 佐野賢治「橋の象徴性－比較民俗学的一素描－」，竹田旦編『民俗学の進展と課題』，図書刊行会，1990年。

(2) 牛古城ら修，周之禎ら撰『荏平県志』，1935年鉛印本。〔清〕張云龍ら修，張風翔纂揖『招遠県志』，清道光二十六年刊行本。

(3) 湯偉康，杜黎著『滬城風俗記』，上海画報出版社，1991年，31～34頁。

(4) 洪錫謨著『東国歳時記』，朝鮮光文会，1911年。

(5) 恵西成，石子編『中国民俗大観（下）』，広東旅遊出版社，1988年，62～64頁。

(6) 永尾龍造著『支那民俗志』第六巻，中国民俗学会・東方文化書局影印，1971年，740～741頁。

(7) 林河著『「九歌」与沅湘民俗』，上海三聯書店，1990年，268～269頁。

(8) 蘇州民俗博物館編，『蘇州民俗』，「満月剃頭」一節，中国民間文芸出版社，1985年。

(9) 古家信平，松本浩一「王爺醮祭の儀礼空間」，『環中国海の民俗と文化』第二巻『神々の祭祀』，株式会社凱風社刊行，1991年。

(10) 中国民間文芸出版社編『中国地方風物伝説選（第二集）』，中国民間文芸出版社，1983年，88頁。

(11) 宋哲「西南民間故事（上）」(1956年)，婁子匡編校：国立北京大学，中国民俗学会『民俗叢書』第158冊，東方文化書店複刊，1970年。

(12) 曾道原著，陳泗東補述「桐陽旧迹詩記」，載『泉州文史』第六，七期合刊，1982年。
(13) 『広西民族伝統建築実録』広西科学技術出版社，1991年，149～150頁。
(14) 袁定華「定海状元橋」，張行周『寧波風物述旧』(1974年)，婁子匡編『民俗叢書』第149冊。
(15) 劉万章「洛陽橋故事」，『民俗』第27，28期合刊。
(16) 〔清〕陶元藻ら撰『延平府志』巻七，同治十二年重刊本。
(17) 宋徳胤著『喪葬儀観』中国青年出版社，1991年，38頁。
(18) 陳仲瑾，陳泗東「泉州喪葬風俗記聞」，泉州市民政局，泉州市志編纂委員会辨公室編『泉州旧風俗資料匯編』1985年。
(19) 魏伯儒捐贈『十殿閻王』，国立歴史博物館，1984年，35～36頁，54頁，60頁。
(20) 何彬「蘭渓・麗水の道士たち－中国浙江省中・南部の調査から－」，『比較民俗研究』第五号，1992年，3月。
(21) 張租基編『中華旧礼俗（二集）』(1928年編)，世界客属第五次忌親大会記念出版，日本学振総会，1980年。
(22) 常人春著『老北京的風俗』，北京燕山出版社，1990年，344～345頁。
(23) 李金生主編『林県民俗志』，黄河文芸出版社，1988年，19頁。
(24) 林明義主編『台湾冠婚喪葬家礼全書』，武陵出版社有限公司，1991年，49頁。
(25) 孫旭軍ら編著『四川民俗大観』，四川人民出版社，1989年，148頁。
(26) 『貴州文物古迹伝説選』，貴州人民出版社，1985年，132～134頁。
(27) 北京市民間文学叢書編輯部『頤和園伝説』，中国文聯出版公司，1985年，196～198頁。
(28) 『浙江風俗簡志』，浙江人民出版社，1986年，358頁。
(29) 『中華民俗版画』，国立歴史博物館印行，1977年，34頁。
(30) 黎徳芳ら纂修『夏邑県志』，1920年石印本。
(31) 〔清〕施景舜ら纂修『項城県志』巻六，宣統三年，石印本。
(32) 呉錫璜纂『同安県志』1929鉛印本。〔清〕紐承藩修，何修淵纂『光澤県志』巻十二，清光緒二十三年刊本。
(33) 片岡巌著『台湾風俗誌』，青史社，1923年，228頁。

付　　記

本論文は平成3年度日本学術振興会外国人特別研究員として，「比較民俗方法論の基礎的研究」をテーマとして，一年間筑波大学民俗学研究室で行なった研究成果の一部である。受入れ教官の佐野先生はじめ，教室の教官・大学院生の皆様はじめお世話になった方々にこの場を借りてお礼申し上げます。

また，このような機会を与えてくれました日本学術振興会，筑波大学歴史・人類学系に記して謝意を表したいと思います。